

編集者のことば

都市研究センターの7年計画として1981年にスタートした「大都市居住の環境整備に関する研究」のうち、第3グループは、都市イメージに関して継続的研究を行なった。ここに収めた6編の論文は、いずれもこれらの研究の成果である。6編のうち3編は、すでに学会や学術雑誌に発表したものに加筆したものである。(各論文の註に出典が明示されている)。従って3編が本特集号のためにまとめられたものである。

この7年間に集められたデータは10,000件を越え、年齢も9才から老年までが含まれている。データの収集地は、東京、大阪はもとより、稚内、函館、白河、水戸、鳥取、杣岐、名瀬、喜界、石垣などで10箇所を越えている。

研究グループは、はじめ加藤義明、詫摩武俊、今井省吾、林洋一、山本真理子の5人であったが、今日では、今井、林、山本の諸氏が転勤で本学を去り、新たに菅原健介、佐藤達哉の両氏が参加してきた。

都市イメージを取り上げて、これを研究対象としたいきさつは、次のとおりであった。即ち、この研究の前の7年計画は、大都市や地方の集合住宅と一戸建住宅の居留意識の問題であった。研究結果の一つに、人々は都市では、集合住宅、地方は一戸建住宅がよいという考えを持っていることが明らかになった。では人々は大都市、あるいは地方というものをどう捉えているのかということが問題にされた。これとは別に都会への憧れ現象(特に高校生で強い)、都会禁忌現象(特に成人男性で強い)といったことも明らかにされた。そこで、都会とは一体なんなのか、都会は人々(都会に住んでいる人、地方に住んでいる人)にどのように捉えられているのかを明らかにしようということになったのである。

データの収集地をみると東京、大阪という大都市のほかこれら地域からはおよそ離れた所とやや離れた所が選ばれている。これはそれなりに都会からの距離がイメージ構成に関係あるのではないかとすることを考えてのことである。

また、はじめのうちは、漠然と「東京、大阪のような大都会」を対象としていたが、「大都市の評価とそのイメージ構造」の研究後にもっと具体的な対象が望ましいということになり、以後「東京」と「大阪」を対象としてとりあげた。

今回の論文のうち2編は、11の学会発表論文を纏めたものであり、1編は人文学報No.168(1984年)を編集しなおしたものである。

1989年度にまだ多少の補足的研究が残っているが、ほぼ全研究が完成したこの時点で特集号として論文を纏めることが出来ることは我々研究グループのメンバーにとって大変光栄なことである。6編の論文を通じて、それなりの成果があげられたものと確信している。

7年間にわたる調査研究や論文を纏めるに当たって多くの人の援助を受けた。研究グループを代表してここに心から謝意を表する次第である。

なお、後半の3編は一般投稿論文である。

加藤 義明